

## 室生犀星旧蔵書 詩集『鶴』の書き込みについて

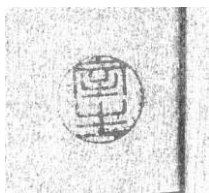
能地克宜

古書として市場に流通していた室生犀星旧蔵書の一冊、犀星の詩集『鶴』は素人社書屋より一九二八年九月一五日に刊行された。初版一〇〇〇部の内の一冊である。他に特別限定布製本（特装本）として四六部刊行されたが、いずれも発行日は同じである。見返し遊びに「室生」（○型）の蔵書印（【1】）が確認できる。

本書には、ルビの加筆の他、軽微な字句の訂正や加筆がなされている。また、収録させた詩の題名に「○」、「×」、「✓」などの記号が青字と赤字で書き込まれている。これらの書き込みには犀星本人による加筆訂正であると断言することができない筆跡が見られる。そのうちの一つは、奥付に記された

「三谷昭」の署名から三谷昭のものであることがわかる。詩集『鶴』に収録

された詩編は、『鶴』刊行後、複数の詩集や全集等に再録されている。本稿は、この書き込み本の特徴やどの著作にこの書き込みが反映されているのかについて、書き込み画像を示しながら確認してみたい。



【1】

【2】のように、目次部分に記載された一二編に鉛筆で黒く印がつけられている。また、本文の詩題上部に、【3】【4】のように青ペンで小さな「○」や「✓」や「×」、赤ペンや青ペンで大きな「○」を付したものが合計で五九作ある。「×」は後に再録・抄録される際に削除された作品、「○」や「✓」は以後の著作にも再録・抄録される作品というように、まずは捉えることができるだろう。

**【2】**

文章以前	三
彼と我	一四
星の斷章	六
情熱の射殺	一八
人家の岸邊	二〇
垣なき道	二五
友情的なる	二四
我は	二六
斷層	二八
彼女	三

客 問

子供は鶴のやうに白い服を着て、  
部屋の間を歩いてゐる、  
彼女はからだちうをレースの花に護られ、  
美しく晴々しい天氣を迎へてゐる。

【3】

我 は

我は清く生きんことを願へり、  
我は美しき恵あらんことを乞へり、  
我はまた富と名とを祈れり、  
我は、――

【4】

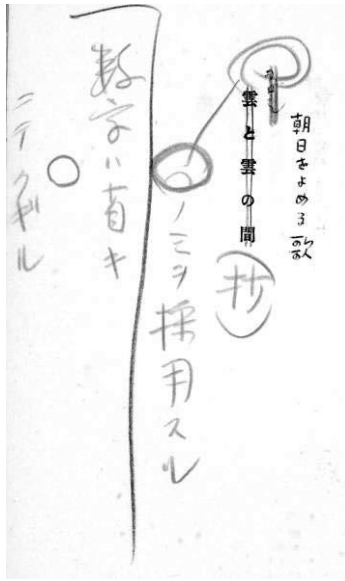
第十卷』（非凡閣、一九三七年六月）、④『室生犀星詩選集』（新潮文庫、一九三八年十一月）、⑤『定本室生犀星詩集』（竹村書房、一九四一年十二月）、⑥『室生犀星自選詩集』（高桐書院、一九四七年五月）、⑦『室生犀星詩集』（鎌倉書房、一九四七年十一月）、⑧『室生犀星詩集』（酣燈社、一九五一年五月）、⑨『室生犀星詩集』（弘文堂、一九五四年六月）、⑩『室生犀星詩集』（岩波文庫、一九五五年八月）、⑪『室生犀星作品集第一卷』（新潮社、一九六〇年五月）、⑫『室生犀星全詩集』（筑摩書房、一九六二年三月）、⑬『室生犀星全集第四卷』（新潮社、一九六五年十一月）、⑭『定本室生犀星全詩集第二卷』（冬樹社、一九七八年十一月）。

ところが、この記号通りに再録・抄録した著作は左記の一覧表の通り一冊もない。

		時鐘 赤丸	目次上 都路筆	青ペン ✓	青ペン 小丸	青ペン 大丸	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
文 章 以 前	切なき思ひぞ知る	○	.					○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	老乙女	○→×			○→×				○	○	○	○	○			○	○	○	○	○
	何者ぞ			✓				○	○	○	○	○				○	○	○	○	○
	埃の中		.	✓				○	○	○	○					○	○	○	○	○
	彼女	○		✓				○	○		○					○		○	○	○
	文章以前			✓					○		○					○	○	○	○	○
	彼と我		.						○	○	○					○	○	○	○	○
	星の断章				×				○		○					○	○	○	○	○
	情熱の射殺	○		✓		○		○	○	○	○					○		○	○	○
	人家の岸辺								○	○							○	○	○	○
	垣なき道				×				○		○	○				○		○	○	○
	友情的なる	○	.		○	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○	○
	我は		.		×		○	○	○		○	○				○		○	○	○
	断層			×				○	○	○							○		○	○
	彼女				×			○	○									○	○	○
	巨鱈	○			○	○		○	○								○		○	○
	斯く汝らに語る			✓						○	○							○	○	○
	真実なる思想			✓						○	○							○	○	○
	行ふべきもの	○			○	○			○	○								○	○	○
	口の中に見ゆ			✓				○	○	○							○	○	○	○
	十人の母親				×				○	○							○		○	○
	メイ・マソカアボーイ				×				○									○	○	○
	凍えた顔								○									○	○	○
大 山 脈 の 下	山の中	○		✓		○	○		○		○						○	○	○	○
	山上の星	○		✓		○	○		○				○	○				○	○	○
	右に就いて	○		✓		○												○	○	○
	朝				×				○										○	○
	鏡		.		×				○		○							○	○	○
	朝の路				×		○											○	○	○
	天気		.		×				○		○								○	○
	王府の朝			×						○									○	○
	客間	○			○	○			○										○	○
	山住み	○			○	○			○	○									○	○
	白い旅籠				×		○		○								○	○	○	○
	ライオン				×		○		○										○	○
	御使よりも先に			✓	×				○	○		○				○			○	○
	愚者の剣	○		✓		○	○			○	○					○		○	○	○
	砂塵の中		.		×			○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
	不安	○			○	○				○									○	○
	椅子				×			○		○									○	○
朝 日 を よ め る 歌	その一							○		○								○	○	○
	その二							○		○								○	○	○
	その三							○		○								○	○	○
	その四							○		○								○	○	○
	その五							○		○								○	○	○
	その六							○		○								○	○	○
	その七	○						○		○								○	○	○
	その八							○		○								○	○	○
	その九							○		○								○	○	○
	その十							○		○								○	○	○
	その十一							○		○								○	○	○
	その十二							○		○								○	○	○
	その十三							○		○								○	○	○
	その十四							○		○							○	○	○	○
	その十五							○		○								○	○	○
	その十六							○		○								○	○	○
	その十七							○		○								○	○	○
	その十八							○		○								○	○	○
	その十九							○		○								○	○	○
	その二十							○		○								○	○	○
	その二十一							○		○								○	○	○
	その二十二							○		○								○	○	○
	その二十三	○		✓		○			○										○	○
	その二十四								○									○	○	○
	その二十五			✓					○										○	○

		時鐘 赤丸	圖次上 都路筆	青ペン ✓	青ペン 小丸	青ペン 大丸	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
朝 日 を よ め る 歌	その二十六	○			○	○	○		○										○	○
	その二十七	○			○	○	○		○										○	○
	その二十八	○			○	○	○		○										○	○
	その二十九	○			○	○	○		○										○	○
	その三十	○			○	○	○		○										○	○
	その三十一	○			○	○	○		○										○	○
	その三十二	○			○	○	○		○										○	○
	その三十三	○			○	○	○		○										○	○
	その三十四	○			○	○	○		○										○	○
	その三十五	○			○	○	○		○										○	○
鳥 と 鳥 の 間	その三十六						○		○										○	○
	その三十七	○			○	○	○		○										○	○
	その三十八	○			○	○	○		○										○	○
	その三十九	○			○	○	○		○										○	○
	鷺鳥								○	○							○		○	○
	己は思ひ出す	○				○	○		○									○	○	○
	瓦の鯉						○		○				○	○					○	○
	塔の中				○→×	○→×			○	○								○	○	○
	深夜	○			○	○			○	○								○	○	○
	鶴(第一連)								○										○	○
鶴	鶴(第二連)								○										○	○
	鶴(第三連)								○										○	○
	鶴(第四連)	○→×				○→×			○										○	○
	彼女	○		✓		○			○	○									○	○
	天使	○				○	○		○									○	○	○
	桃の枝					○			○										○	○
	女中	○			○	○	○		○									○	○	○
	水入れ	○			✓	○	○		○										○	○
	よちすがら								○	○									○	○
	福士幸次郎に	○				○			○									○	○	○
俳 四 章	俳諧詩を寄けたる人に																		○	○
	旅人によせてうたへる								○										○	○
	山脈								○	○			○	○					○	○
	雪に					○						○							○	○
	からたちの花	○			○	○			○	○									○	○
	札に寄す				×				○	○									○	○
	夜が来た								○		○	○						○	○	○
	明日	○			○	○	○		○				○	○			○		○	○
	寂鮎								○				○	○					○	○
	朝前								○								○	○	○	○
日 記 詩 録	いつも釣をしてゐる子供	○			○	○			○	○									○	○
	子手								○										○	○
	いなご								○										○	○
	子供								○	○									○	○
	少女の中の少女に					○				○							○		○	○
	あさぜみ	○			○	○			○	○							○		○	○
	野あそび	○			✓	○			○	○								○	○	○
	縁側								○									○	○	○
	松風								○	○									○	○
	椿					○			○										○	○
日 記 詩 録	夜明								○										○	○
	緑の荒野								○										○	○
	寒さ								○	○									○	○
	雪								○										○	○
	雪								○										○	○
	ゆふつ方								○										○	○
	梅								○										○	○
	歩み								○										○	○
	花びら								○										○	○
	残雪								○										○	○
日 記 詩 録	簾露								○										○	○
	川べり								○										○	○

また、⑭『定本室生犀星全詩集第二巻』の「第二巻改題」に「初版本では「朝日をよめる歌」と「雲と雲の間」の章題が入れ替っており、本全詩集では、初版本目次、筑摩書房版全詩集に拠り正した」とあるように、初版本の目次と本文は章題がそれぞれ逆になったまま刊行されていた。旧蔵書『鶴』の書き込みにおいても、青字にてそれぞれ訂正が施されているが、さらに赤字にて【5】のように「○ノミヲ採用スル」「数字ハ省キ／○／ニテクギル」という指示が書き込まれている。



### 【5】

ところが、「朝日をよめる歌」を再録・収録した①『室生犀星詩集』（改造文庫、一九二九年一月）、③『室生犀星全集第十巻』（非凡閣、一九三七年六月）、⑫『室生犀星全詩集』（筑摩書房、一九六二年三月）、⑬『室生犀星全集第四巻』（新潮社、一九六五年十一月）、⑭『定本室生犀星全詩集第二巻』（冬樹社、一九七八年十一月）の五冊はいずれも「その一」「その二」というように、初版に記載された通り、「○」では区切らず数字が記載されている。これらのことから、詩題に記した記号や朱書きの指示通りに編まれた著作は結果的に刊行されなかったと考えることができる。

それでは、この書き込みは何のためになされたのであろうか。複数の筆跡のある本書の奥付〔6〕には、前述の通り「三谷昭」の記名がある。三谷昭（一九一〇―一九七八）は俳人・編集者で、詩集『鶴』を刊行した素人社書屋に一九三〇年より勤めていた<sup>3</sup>。『鶴』刊行は一九二八年のため、一九三〇年入社だと、三谷が編集に携わった可能性は低い。しかし、三谷が自らを回顧した文章には、入社が一九二九年とも一九二八年とも言えるような記述も窺える。

私が素人社に入社して、林田〔茂雄、筆名・鳴海四郎、引用者〕の下で働いたのは、彼がプロ短歌をはじめる前の昭和四年頃のことである。その頃は詩歌俳書とはいえ、詩の本に力を入れていた。室生犀星の『鶴』、山村暮鳥の『土の精神』、佐藤惣之助の『トラシット』、萩原朔太郎の『詩論と感想』など、多くの詩書を出版していた。私もいくらか詩を書いていたのでその縁故から素人社に入ったわけであるが、そ



【6】

れだけに、著名な詩人が店に入ってくると、息づまる思いで一挙手一投足を眺めたものだ。まだ旧制中学を出たばかりの、十七歳ごろのことである。<sup>4</sup>

だが、犀星と面識が全くなかったというわけではない。三谷は「素人社ものがたり（一）」『俳句研究』一九六〇年一・二月）において、以下のように入社前後の素人社について語っている。

詩歌専門の古本屋だから、お客もみんな風変わりだった。書棚をずつと眺めたあとで奥に坐っている鳴海氏を相手に一とくさり詩論をたたかわせて行く若い詩人が多かったが、時には萩原朔太郎、西條八十、佐藤惣之助など著名な詩人が訪れることもすくなくなかった。それは一方、古本を商つていると同時に、詩歌の出版もやつていて、犀星の「鶴」暮鳥の「土の精神」尾崎喜八の「曠野の火」など、かずかずの詩集が上梓され、したがってそれらの人々の往来もひんばんにあつたからである。

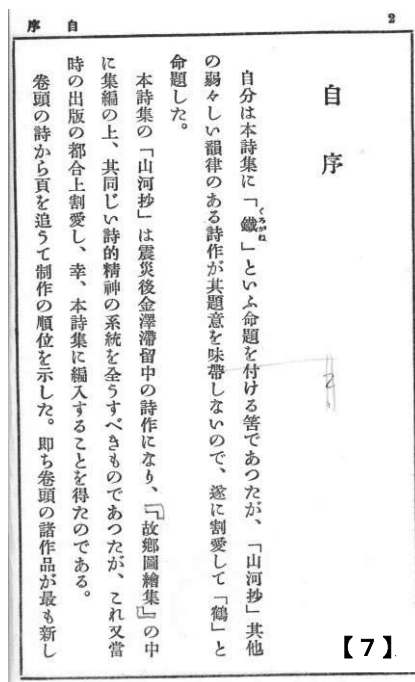
また、三谷は犀星を敬愛する詩人平木二六とも素人社時代から交流があり<sup>5</sup>、犀星に近いところにいた人物の一人であると言える。

ところで、詩集『鶴』は当初、一九二八年八月刊行の予定だった<sup>6</sup>。しかし、九月半ばを過ぎても犀星の手元に届かなかった。犀星が素人社の社主・金児農夫雄（筆名・金児杜鵑花）に金沢から送った葉書（同年九月十九日消印）には、「拝けい、僕は左記に仮寓いたし候間おしらせ申し上げ候、「鶴」はいつころ出来いたし候や、」とある。つまり、詩集『鶴』は前述のように章題が入れ替わって印刷され、しかも大幅に



発行が遅れていた。犀星は詩集『鶴』の「自序」末尾において、「自分は巻頭諸作に於て自分の中に膠着してゐる何物かを蹶破る氣持を持ち、それに打つかつて行つたのが最近の自分である」と語り、晩年にはこの詩集によつて「些かの立直りを示し」<sup>7</sup>たとも述べており、犀星にとつて詩集『鶴』は後に刊行される詩集『鐵集』（椎の木社、一九三二年九月）とともに、作家活動において転機となる詩集であつた。三谷が素人社に在籍していた時期に書き込まれたものであるかどうかについては詳らかにすることはできないが、平木二六をはじめ犀星に近いところにいた『驢馬』同人グループと親しかつた三谷が、どこかの段階で書き込みを行つていたということは間違ひではないだろう。

三谷の記名と同じ筆による書き込みの多くは、誤記の訂正となつてゐる。例えば、「自序」冒頭は、「自分は本詩集にくろがね「鐵」といふ命題を付ける筈であつたが、「山河抄」其他の弱々しい韻律のある詩作が其題意を味帶しないので、遂に割愛して「鶴」と命題した。」から始まる。



この「味帯」に青ペンで「？」と記し、さらに二重傍線で消している（【7】）。

この「味帯」<sup>8</sup>という語は犀星の初期の著作、例えば、「詩を味帯した一つの礼讃になつてゐる」『新しい詩とその作り方』文武堂書店、一九一八年四月）など、特に詩について言及した文章に見られる。「味帯」は犀星のいわば造語であり、犀星自ら「？」をつけることはない。「？」の書き込みは犀星以外の者によるものだということがここから窺える。

本書の書き込み部分のうち、ルビ振り箇所は一八篇の詩に、合計で二四箇所ある。しかし、①～⑭の著書のほとんどは初刊本に記載されたルビ以外のルビを新たに付けたものはない。唯一、④『室生犀星詩選集』（新潮文庫、一九三八年一月）のみが、初刊本のルビに加え、新たにルビが振られているが、書き込み通りにルビが振られていない。本書のルビ書き込み部分と、④のルビ追加部分を示した一覧表は下記の通りである。

章題	詩題	ルビ（青ペンに赤丸）	④『室生犀星詩集』
文章以前	埃の中	「尾」（つ）	ルビ加筆、他箇所ルビあり
	文章以前	「既」（も）	ルビ加筆なし
	彼と我	「有」（も）、「癪」（いだ）	ルビ加筆
	星の断章	「勿休」（もつたい）	ルビ加筆なし
	我は	「対」（むか）	ルビ加筆なし
	断崖	「噓」（の）	ルビ加筆なし
	巨鱗	「露」（あら）、「酷」（むご）	ルビ加筆なし
		「対」（むか）。※赤ペンに青丸	
	斯く汝らに語る	「問」（たづ）、「壁」（おと）	ルビ加筆、他箇所ルビあり
	真実なる思想	「啼」（な）、「降」（くだ）	ルビ加筆「啼」（なげ）、「降」ルビ加筆なし
大山脈の下	行ふべきもの	「囁言」（たはごと）	ルビ加筆
	己の中に見ゆ	「引掻」（ひつか）	ルビ加筆なし、他箇所ルビあり
	十人の母親	「聳」（つが）	ルビ加筆、他箇所ルビあり
	鏡	「敬」（や）、「漸」（やつ）	ルビ加筆なし
	山住み	「喫」（の）	ルビ加筆
	驚鳥	「草臥」（くたび）	ルビ加筆
	雲と雲との間	「嘲歌」（ラツパ）	ルビ加筆、他箇所ルビあり
	鏡	「凝視」（しつくひ）	ルビ加筆、他箇所ルビあり
山河抄	いつも釣ましてゐる子供	「凝視」（みつ）	ルビ加筆、他箇所ルビあり

また、本書の書き込み部分のうち、ルビ振りを除く全ての加筆・訂正は一一箇所ある。

章題	詩題	加筆・訂正箇所
文章以前	メイ・マツカアボーイ	【訂正】「さゞなみ」 →「さ <b>ざ</b> なみ」(青ペン) 【加筆】「滑か」 →「滑 <b>ら</b> か」(青ペン)
大山脈の下	朝	【加筆】「メリゴーラウンド」 →「メリ <b>ー</b> ・ゴーラウンド」(青ペン)
大山脈の下	御使よりも先に	【訂正】「先きに」 →「 <b>き</b> 」？(青ペン)
雲と雲との間	深夜	【訂正】「迥」→「 <b>廻</b> 」(青ペン)
鶴	鶴（第四連）	【訂正】「云」→「 <b>言</b> 」(青ペン)
古調四章	俳諧詩を寄せたる人に	【訂正】「云はむより」 →「 <b>言</b> はむより」(青ペン)
山河抄	夜が来た	【訂正】「云ふ」→「 <b>言</b> ふ」(青ペン)
山河抄	明日	【訂正→取消】「それなのに」に <b>傍点</b> → <b>傍点取消</b> (青ペン)
山河抄	ゆふつ方	【訂正】「音」→「 <b>賣</b> 」(赤ペン)
山河抄	置露	【訂正】「曳きつゝ」 →「曳き <b>つ</b> 」(青ペン)

例えば、章題「雲と雲との間」に収録された詩「深夜」の書き込みは以下のようになっている【8】。

「深夜」が収録された著作は、③、④、⑫

と⑭の五冊である。「廻」から「廻」への

正字と異体字の差であるが、初版本の字体

「廻」のまま再録したものはそのうち四冊

であった。青ペンではなく、鉛筆で訂正が

なされており、青ペンでこれまで書き込み

を行ってきた三谷昭とも異なると思われ

き筆跡が確認できる。

また、前掲加筆・訂正の書き込みのうち、

「ゆふつ方」に施された訂正が反映されて

いるのは③『室生犀星全集 第十卷』（非

凡閣、一九三七年六月）及び、⑬『室生犀

星全集第四卷』（新潮社、一九六五年一

月）である【9】。



## 深夜

己は鐵瓶をさげて下りてゆく、

谷川へ下りてゆく、

峻しい道をつたひながら

己は谷間の水のほとりで憩む、

遙かに遠い書齋のつかれを醫し、

美しく清い水をのむ、

この己の姿は山の上から見えるだらう、

或ひは草の間にかくれて見えないかも知れない、

ともあれ己は水のはとりに憩んでゐる、

この己を見つづけるものは隣の女中くらゐであらう、

いまは己の家はもう寢静まつてゐるからだ。

ゆふつ方

ひるすぎ晴れ、

ゆふつ方雪となる

ゆふつ方もの音の鈴きいゆ。



三月十七日

202

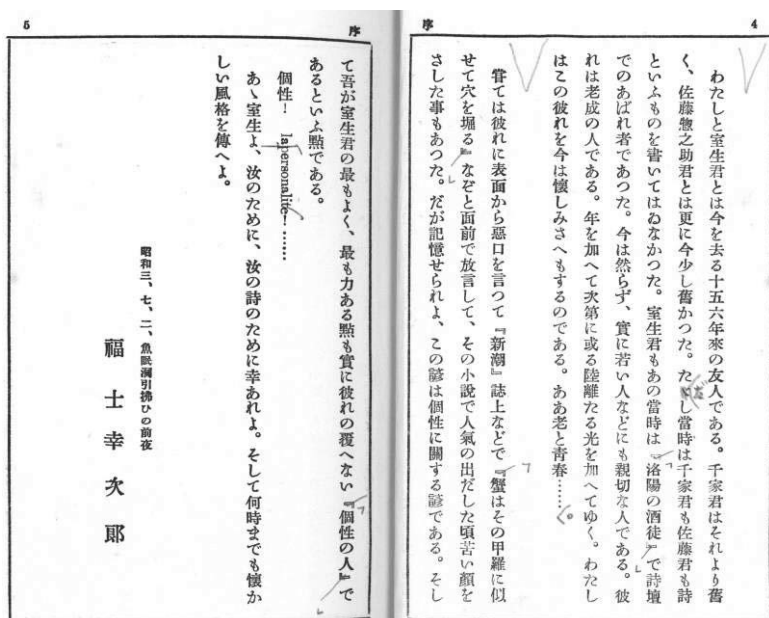
### 【9】

⑬に掲載された伊藤信吉「改題・校訂」には、「テキストはすべて初版本による」とあるが、「五二頁上段第二行「もの賣の」、初版本「もの音の」を非凡閣版全集により訂正した」と記されている。③の非凡閣全集は、本書の加筆・訂正の書き込みすべてを

反映してはいない。

さらに言えば、本書には、富士幸次郎の「序文」にも書き込みがなされている（110）。「序文」後ろから三行目の「lapersonalite」に青字で書き込みがなされ、「lapersonnalité」と修正された他、鉛筆にて改行や句点、『』から「」への修正がなされている。注目したいのは、前から二行目の「たゞし」という踊り字が「ただし」に訂正された点である。踊り字を用いない表記が使われ出したおよそ一九四五年以降から、犀星が作家活動を行った一九六二年までのいずれかの時期に、この鉛筆書きの書き込みがなされていたと推察できる。また、この「序文」が再録された著作は、前掲①～⑭のうち、⑬『室生犀星全集第四巻』（新潮社、一九六五年二月）のみである。

以上のことから、本書には、複数の筆跡による書き込みが確認できるのだが、それぞれの書き手をすべて特定することは難しい。しかし、本書に施された書き込みのうち、ルビ振りを除く全ての加筆・訂正に応じた著作は、犀星没後に刊行が始まった新潮社版全集の第四卷(⑬)のみということがわかる。ただし、本書が⑬のため書き込まれたということは断言できない。複数の筆跡による書き込みが確認できる本書の特徴については、引き続き検討を加えることとしたい。



<sup>1</sup> 「その一」から「その三十九」で構成された「朝日をよめる歌」は一編とする。

<sup>2</sup> ⑭『定本室生犀星全詩集第二卷』の「凡例」には、「一、本全詩集は、室生犀星の詩を、初版本及び未刊行詩篇の形態でそのまま読者に提供することを第一義とした。従つて、明らかな誤字・誤植・仮名遣いの誤り等も、すべてそのままに再現してある。」とあるように、章題の入れ替え以外はほぼ初版の通りの表記となっている。

<sup>3</sup> 楠本憲吉「三谷昭」(『日本近代文学大事典 第三卷』講談社、一九七七年一月)

<sup>4</sup> 三谷昭「ポケット自伝」(『天籟通信』一九七一年一月〜一九七二年十二月、引用は三谷昭『俳句詩論集』(三谷昭俳句史論集刊行会、一九七九年一〇月)に拠った。

<sup>5</sup> 三谷昭「素人社ものがたり(2)」(『俳句研究』一九六〇年三月)

<sup>6</sup> 小島貞一宛葉書(一九二八年七月八日消印)に、「僕は詩集『鶴』八月発行と、随筆集一冊の編集、多分九月十五六日ころ金沢に行きます」とある。

<sup>7</sup> 室生犀星「解説」(『室生犀星全詩集』筑摩書房、一九六二年三月)

<sup>8</sup> 例えば、「詩形は破壊されても慣要誤律が味帶して来る以上詩形は依然存在する。」(「愛と詩に就いて」

『A R S』一九一五年一〇月、「詩を味帶した一つの礼讃になつてゐる。」『新しい詩とその作り方』文  
武堂書店、一九一八年四月）などがある（傍線引用者）。